

学位論文題名

柿本人麻呂と和歌史

学位論文内容の要旨

村田氏の論文は、代表的な万葉歌人柿本人麻呂の作品研究を通じて万葉集第二期を中心とする古代和歌史を構築することを試みたものである。従来の歌人研究は主としてその関歴と作歌活動との融合からなっているが、本論では、作品論(表現論)に純化することを通じて、いわば「文学史としての柿本人麻呂」を析出せんとする、明確な方法意識に基づいた研究ということができる。また、その作品分析の視点としては、異伝分析という従来の観点に加え、「時間表現」と「話者」の面からの分析という、いまだ学界では主流となっていない斬新な方法を意欲的に導入している。その分析対象は柿本人麻呂の代表的作品のほぼ全てに及び、近年の柿本人麻呂作品研究の新しい潮流を代表するものとして位置づけることができると思われる。

第一章は本論文における方法の前提となる観点の提示と、その角度から捉えた従来の研究史の展望である。村田氏は、柿本人麻呂をあくまでも和歌表現を生み出した母体、すなわち、文学史上の個性として捉える、という見方を提示する。そして、分析の視点を、作品の異伝に関する研究、作品における時間表現に関する研究、作品内の話者に関する研究の三点に絞り、その面から研究史を追うとともに、本論文の立脚点を明確にする。具体的には、(1)人麻呂作品における異伝を基本的に改稿と見るとともに、その改稿を外発的なものとして理解すべきであること(2)人麻呂作品が神話時間の表現と継起する時間の表現とを基調としていることを先行研究に導かれつつ述べ、それが歌表現としてどのように継承されているかにこそ問題があること(3)人麻呂作品における多様な話者のありようを、作者人麻呂とは別個に歌表現の問題として捉えるべきこと、を述べる。

第二章は本論文の中核的な部分といえるもので、万葉挽歌の歴史を辿りつつ、その一つの達成としての人麻呂の挽歌作品について、第一章で提示した分析の視点に立って論じている。すなわち、万葉挽歌の発生を異文化接触の結果として捉えた上で、挽歌には「死を悼む主体」と「歌作者としての第三者」とが、「根生いの二重性」として内包されていることを述べ、ついでそれが人麻呂挽歌を通じてどのように変容してゆくかを、個別の作品を通じて考究する。その際、これまで人麻呂作品を分析する際の大きな基軸となっていた「場」の論理については、これを用いることを最小限にとどめ、あくまでも表現論的立場から作品分析をおこない、さまざまな話者のありようをそれぞれの作品に即して定位する。その結果、挽歌に根生いの二重性は、「泣血哀慟歌」に見られるような一人称を徹底した

哀傷歌的な方向と、「吉備津采女挽歌」に見られる、話者が死者に対して第三者的な立場を徹底させる方向へと分化して行くこと、さらに、前者は文芸としての哀傷歌へと向かう可能性が高く、後者は第三期の伝説歌への道筋を示しているであろうことを論じる。

第三章は、人麻呂作と覚しき人麻呂歌集七夕歌、および万葉集巻一に収載されている人麻呂作の雑歌を各論的に取り上げている。人麻呂歌集七夕歌論は、初期七夕歌の特徴を伝説歌と関係づけながら、人麻呂歌集七夕歌を白鳳期の文学史の中に定位するものである。また、「近江荒都歌」論では、詠作時期の先後について論の別れる日並皇子挽歌との先後関係を述べるとともに、異伝系統と本文系統とが、それぞれ近江の地での詠、大和帰京後の詠であることを論じる。これは一つの見解としてみとめられよう。次に「吉野讃歌」論では、当該歌の詠作時期の特定を試み、二群からなる当該歌が有機的な関連を持ち、同一機会の詠であることを論証する。この結論自体は妥当なもので、原著論文公表以後学界の通説になりつつあると評価できる。さらに、「安騎野歌」論では、当該歌が讃歌として機能していることを論じつつ、天武王権と当該歌のかかわりについて、論じる。あわせて、当該歌全体が軽皇子の登極を見据えての巧緻な構成を保っていることを述べる。

四章は全五節からなり、直接に人麻呂作歌を論じたものではないが、文学史上に人麻呂作品を定位する上で必要な歌人、作品について考察する。柿本人麻呂を文学史上の個性として捉えようとする本論において、同時代の歌の状況把握と、文学史論の基本となる作品論を支える訓詁は不可欠である。この点を補うのが本章の諸論である。大名児についての論は、序歌に現われた人名を通じて、その記載性を論じたものである。一方、舍人娘子論は、前代の額田王からの流れを汲む専門的歌人として、舍人娘子を文学史上に積極的に定位する。また、舍人慟傷歌についての論は、「東の御門」という表現から歌表現の持つ天武王権への射程を探るものである。さらに、大宝元年紀伊行幸歌論は、歌群構成を論の中心としつつ、有間皇子に関わる伝説の享受を考える。これらに対して、四八番歌についての論は訓詁を中心とした論で、安騎野歌論構築の基礎作業となっている。

第五章は、本論の総括的な章である。第一節は文学史記述の重要な要素のひとつと思われる作品の制作年代についての考察である。先行の章において様々な形で述べた人麻呂作品の詠作時期の論に、各論では扱わなかった作品のそれを補いつつ、人麻呂作品を時系列上に配置する。おおむね穏当な処置といえるが、多少前後の記述が整合しない部分が見られる。第二節は、本論の方法論的な中心となって来た話者の問題と時間表現の問題とについての総括であり、前者については「視座の外延化」という観点から、表現に立ちあらわれて来る景の変化と、話者とを連絡させつつ論じる。また後者については、第一章において述べた二つの時間表現が人麻呂作品において止揚され、これまでになかった新しい時間表現が獲得されたことを指摘する。そして、こうして捉えられたダイナミズムを柿本人麻呂という個人に還元することなく、万葉集第二期の時代性の中において、柿本人麻呂を文学史上に定位して結論としている。両視点とも、村田氏独自の見解を学界に問うものとなっているが、比較的未開拓の視座ということもあって、今後論議を呼ぶことになるであろう。

なお本論文の構成の概略は以下のとおりである（各節の題名は省略）。

第一章 柿本人麻呂と研究史	p 3
第二章 挽歌と人麻呂	p 29
第三章 雑歌と人麻呂	p 195
第四章 人麻呂とその周辺	p 281
第五章 文学史としての入麻呂	p 357
収録論文覚書	p 378
引用文献一覧	p 382

(400字詰原稿用紙換算約945枚)

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 身 崎 壽

副 査 教 授 南 部 昇

副 査 教 授 後 藤 康 文

学 位 論 文 題 名

柿本人麻呂と和歌史

審査委員会は、本論文が提出されて以後、たびたび委員会を開催し、申請論文を慎重に精読・審査し、また長時間にわたる口述試験を実施して、十分に審議を重ねて適正な評価に努めた。その結果、以下に述べるような本論文の評価に鑑み、全員一致して、村田右富実氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達して、文学研究科教授会に報告した。教授会はこの報告に基づき審議を重ねて、これを承認したものである。

村田氏の論文は、柿本人麻呂の作品研究を通じて万葉集第二期を中心とする古代和歌史を構築することを試みたものである。本論では、安易な作家論への寄りかかりを排除し、作品論（表現論）に純化することを通じて、いわば「文学史としての柿本人麻呂」を析出せんとする、明確な方法意識に基づいた研究ということができる。また、その作品分析の視点としては、異伝分析という従来の観点に加え、「時間表現」と「話者」の面からの分析という、いまだ学界では主流となっていない斬新な方法を意欲的に導入している。その分析対象は柿本人麻呂の代表的作品のほぼ全てに及び、近年の柿本人麻呂作品研究の新しい潮流を代表するものとして位置づけることができると思われる。

第一章は本論文における方法の前提となる観点の提示と、その角度から捉えた従来の研究史の展望である。すなわち分析の視点を、作品の異伝に関する研究、作品における時間表現に関する研究、作品内の話者に関する研究の三点に絞り、その面から研究史を追うとともに、本論文の立脚点を明確にする。

第二章は本論文の中核的な部分といえるもので、万葉挽歌の歴史を辿りつつ、その一つの達成としての人麻呂の挽歌作品について、第一章で提示した分析の視点に立って論じている。すなわち、万葉挽歌の発生を異文化接触の結果として捉えた上で、挽歌には「死を悼む主体」と「歌作者としての第三者」とが、「根生いの二重性」として内包されていることを述べ、ついでそれが人麻呂挽歌を通じてどのように変容してゆくかを、個別の作品を通じて考究する。その際、あくまでも表現論的立場から作品分析をおこない、さまざまな話者のありようをそれぞれの作品に即して定位する。その結果、挽歌に根生いの二重

性は、「泣血哀慟歌」に見られるような一人称を徹底した哀傷歌的な方向と、「吉備津采女挽歌」に見られる、話者が死者に対して第三者的な立場を徹底させる方向へと分化し、前者は文芸としての哀傷歌へと向かい、後者は死が伝説として描かれる第三期の伝説歌への道筋を示していることを論じる。

第三章は、人麻呂歌集七夕歌、および万葉集巻一収載の人麻呂作品を取り上げる。人麻呂歌集七夕歌論では、初期七夕歌の特徴を伝説歌と関係づけながら、それを白鳳期の文学史の中に定位する。また、「近江荒都歌」論では、「日並皇子挽歌」との先後関係を述べるとともに、異伝系統と本文系統とが、それぞれ近江の地での詠、大和帰京後の詠であることを論じる。これは一つの見解としてみとめられよう。次に「吉野讃歌」論では、当該歌の詠作時期の特定を試み、二群からなる当該歌が有機的な関連を持ち、同一機会の詠であることを論証する。この結論は妥当なもので、原著論文公表以後学界の通説になりつつある。さらに、「安騎野歌」論では、当該歌が讃歌として機能していることを論じつつ、それが軽皇子の登極を見据えての巧緻な構成を保っていることを述べる。

第四章は直接に人麻呂作歌を論じたものではないが、文学史上に人麻呂作品を定位する上で必要な歌人、作品について考察する。

第五章は、本論の総括的な章である。先行の章において様々な形で述べた人麻呂作品の詠作時期の論に、各論では扱わなかった作品のそれを補いつつ、人麻呂作品を時系列上に配置した上で、本論の方法論的な中心となって来た話者と時間表現について総括し、前者については「視座の外延化」という観点から、表現に立ちあらわれて来る景の変化と、話者とを連絡させつつ論じ、後者については、第一章において述べた二つの時間表現が人麻呂作品において止揚され、これまでになかった新しい時間表現が獲得されたことを指摘する。そして、こうして捉えられたダイナミズムを柿本人麻呂という個人に還元することなく、万葉集第二期の時代性の中において、柿本人麻呂を文学史上に定位して結論としている。両視点とも、村田氏独自の見解を学界に問うものとなっているが、比較的未開拓の視座ということもあって、今後論議を呼ぶことになるであろう。

本論文は、オーソドックスな作品論としても評価に耐えうる水準を保ちつつ、学界でも未開拓の視座に立ち、作品論を安易に作家論に横滑りさせることなく、文学史（表現史）の中に定位することに努めている点で、決定的に新しい問題意識に支えられた研究ということが出来る。その点で万葉集・古代文学史研究の前進に大きく寄与するものになっていると判断される。審査委員会は本論文のこうした成果を高く評価したものである。